KODAK Gray Scale
© The Tiffen Company, 2000

特へ19
1670

八代洲

八代

書籍集目録を拵へて
照検せよ可申候何人如何取計
いたしたる儀とも莫忘也
を弾小方数老ともに
霜と意とを
清穆教人園水

郷土文庫
響庭文庫
大橋

京より大坂へ十三里。道もむつかしき筋を伝見
の一枚糸。履物ばかりわるむしり神通仙
術まことにあらず。安永世や宝永間西
の雲合丸中に。雷ちり無吾蓮ちるら
都いと思ふ。此の海ちりの六年六月の初数仙
鬼雲より掛ちる事を聞て。はげけて。ちりと
驚りを。はきもちく。耳にぐ。ゆし。瑞くを。
ちりの出ちまに書付て。岡敷西中に御御
船中記かれて。名ちる事あり

一夜船光第一

同録

一 水上を船の影の海 梅柳大小の数
そこしうち平安の船
面しろ程とれ、遠西
真海一前右肩の逆行

二 花ちる字の東山

三 種は船かゆる河原橋
人おのわりく 陸中
雷者海下がる事

四 鶴松の冥途の図

閻魔王の庁の様子

五 信仰あつき弓矢の徳

あらたの利益よ三宝
義をたつる菩提人

六 鬼ゝ雷の神刺医

そもじとこそ
原へ
[illegible]

一夜新造才一

一 ゆとをもつ酒の酒

人皇第一神武天皇大和代国。明僑の。始て関東をひらく
ら也。ゆとり。漫漫。安寧の皇代。遷都わりしなし。植
武天皇延暦三年。都を今の平安城へうつる。第五
桓武の天皇なりて。安堵て百年まで三十代さに
遷都ありしなり。平相国清盛入道。栄花の
わりわりやくを清盛の公。極楽の御ようつし。御の殿
仏門。発心わりて後。同じ新都いづもうゆるれると法御
の神武を守れ。時。人々のらをおもれてなるとて人々
うりしふ。長方帰ひ。極楽の色鄙へ
平安城の栄花を述べ。その月神宝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なるべし。さるかの同人憂かれば世間法
住るなり。貧ゆえ悪をなす。今拵ひ方をもぞんじかの
やうに拵そこなひ、しかるのみず一分乃てうだてハ足
らずして、俗なりといひつけぬ。されども人大数小数
尾ようおぼえ侍ぬ。大寺拵姫ようく物代物を以義して延
お侍りぬ。さて今参つ参八への教訓つゝ安て一家中
感じ入る。又洒落なしかりつ。ある時玉屋玉屋素切海乃
文蔵へ代参やつけられ。もつてのほか。山へ海へ蜜
のうるさあけるを八寸拵ひ乃蛇貝屋が洗ようし
をなかまの拵と拵して拵せしに大寺ようよ
り酒ようをしらせ侍ぬ。ようの拵姫して松細
工人ようの侍後教ようを手をつくして益乃同組として脇を

乃者をおぼえあるる。その中に右乃金太屋つゝ上戸の隠れなく
側ちくめしくれそれ一生ようの酒の美足家老乃同
所詰ようとして尾中朝乃貴人拵びて酒法頂をつくと碑
雪乃酒わり。方紙集ようとおぼく酒乃方をつくねて同
月紙名。お家白雪乃蝶ようす。そもじ上戸の料結ようの名
外乃俗なり。そもそもひとりのつくりの系同腹中ようり世俗
金八し。父ようるべしとおぼえ金太屋つくちんてトけ乃拵ど
て親の方うてように武義学文をつくせよくようとおれ
うとおぼえ親の常ようしてうるうる人拵の
なりようにいて酒ようりへるに飲ようえう。上戸ようれ
とハなぜぞ。一盃ようすくうようの酒ようへいうの碑拵ようの
ちんこ乳ぞうの後ざる半ハ必竟不後ようおぼえ酒

の矢を射て居て合こそ長岡よ者へやそれ。大守さとが
得心いかりけるやそれ日の岡船乃仮止て居。家中仕間の
町人百姓ホまで。大盃停山の絵家老中ちりやうさそれ金
ゑ屋つが恵云を又感じけるに。是南玉よ捨つとけるが年終て大
坂新清の代印ゑ屋つが手に落て海ゑ船とそうくれ物さ酒興
の奇拍しいなりめ

(二) 乗乃つ字ゑ和東山

ひしゝ梗かれ後と寄そうへ。道世の場。長崎みこて
海東表水の山陰よ岡乗せ。挙白雲の絵。今もそれ形
境ハ祈りめ。客ハ事自代岡を拍。ゑ中自代岡を乗ふさし
ゆうそ。人の岡乗りを。つ。い法を渡して生涯のたりいぜ
を和守につそ。おされけるそれ水吉ゑ。つへ。て負

徳と改め。又乗乗咲の袖よ後てあるこの端牛に長崎
ゑ乃方へ粽又把遣ることて打ゑて
ちろ乗ゑ。ちろ乗ゑ。さ寄ゑ。ごゝゑ。ゑ寄。ちろ乗ゑ。
長崎
ちよゑ。ちろ乗ゑ。ゑ。ゑ。

を為してたべられぬ位なり。程なくして作りあわや
まりて学者を勿ぶり。文字を書付るまねをあるをつき
粥かゆ。ゆるへてきたを笑いめ。教わりけかへ人足つけて我
を教えるべきなりやるかなり。出慈悲よ為し給へ
となげきされば。不幾よ先もて祝のれ。わしい給
へだ。わりゝ。しゝて。濱矢わ。きのゝら教ごに本第れ死
を四書よ。そもそず教本り。意ちりをゝづまて。ゆりる。
ゝりのはうもこたりて。来ゝそわゝれば。ゝりぬ。ゝふ。ゝ
んよれをゝれけゝもち。程ゝこゝ。笑ゝいゝ。一小冊を作
らまきるゝとゝや

三 雷曽法師の事

むゝ矢田ゝ矢大野ゝ何葉原早世わゝ名れ矢田江部

ゝて。家の嫡子わまだ世絶れねゝひゝて。播代上風
萩ゝ。を性をおはゝゝわよ。治ゝよ。矢田小口の左ゝ懐文
い生立の祈ゝれ。名井ゝ下ゝ学ゝて。洋殿よゝ。ゝかゝる狂人
房ゝ夏ゝまゝゝわゝて。首遠の祈系をゝげ。出新被れ冊
法を抽んでゝ。がゝゝゝ。ゝ。播ゝ殿ゝ。矢田江部ゝ。
ゝらまゝゝゝ。ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ中ゝて。たゝく。絶入せゝ。ゝ。ゝれ。雷
風の病ゝ。ゝ。ゝ。ゝて。ゝ。雷ゝ。ゝの。蔦ゝ。法ゝ。ゝが。療治ゝ。
家ゝ。ゝ。ゝ。ゝて。ゝ。ゝ。大ゝ。の。家ゝ。播ゝ。矢田江部ゝ。ゝ。ゝ。遠ゝ。ゝ。
ゝまゝゝゝ。ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

を卷き[illegible]なりし[illegible]。此比推[illegible]。人の氏[illegible]。
御の次第[illegible]。家の[illegible]。
皆[illegible]。藤[illegible]を[illegible]。
滅亡。一家中のかげ[illegible]。
[illegible]。[illegible]。
尾を清[illegible]。
人の氣[illegible]。
の[illegible]。
[illegible]。
中[illegible]。
[illegible]。

みを。[illegible]。
ひ[illegible]。
の[illegible]。
[illegible]。
いよ[illegible]。
お續[illegible]。
[illegible]。
次第自然[illegible]。
[illegible]。
[illegible]。
たて。一家中の[illegible]。
[illegible]。

うをもり来りしくうをかへせそれば。うへ形りとなる。
にしてかの。ぼうちうのあるよ。拵くをれ次りて。後よ目見い
たさを。愛乃ゆへ人おをりとりとりせば。雷者ちがづくかんがへる
良つくうて。をを色よなをれば。ゆーさう。辭退ちて
りけりをたくいわるの。恵おりーますたちがづかりとり
とらもよ。ゆたくしみりあるたしでとちとわるを。扇ろと
恵しをはおをもとめもた。ゆーざわ山厳よ。元食の人物
そかとうのかとりとちがづくと。河をたとえ。兼怨ある
痩法師。法帝もかるを色が着し。一味の丹鳥。富者を逃
たてるに。鈴くをるの。ゆーりとりとりとりとる。とこーと取わ
へど。ゆ。ゆをとの山不雷を。後なれをさられめしかざる
愛易の現なり。そ。ゆーりまるは恐をあをた天者

天皇いまだ位に在さざりし時。おんありて。ぜんえを
食のおちりまいと奏しもをれば。三世了達力かりけ。こ
男徒者乃山男ようりとりとりと。宿業病を悩をかよ。剃
刀前池の色てをなくゆ。肉果ハ通れがくて。朕帝位よのが
らげるおよ。恵海を果をくしとて。西宮御下向ありて
後前のゆ小位湯とて。ゆ。ゆ。ゆ

出雲侍よりわやくせひそく小あま屋を取よせ国ごとれてお作
し。[illegible]の近辺を食とせ戸ごさこて。荻くを色形を
やめし。志のびて枕もり。ある歌おもかるものかりうて。草[illegible]
たる男物やうへしそてちいたる木の実をこうむし。色ハ
紅花の三角れ実やり。山木中をく一法ある歌花
咲て法法をわうつと霊木なり。三角ハ三十色一世
乃義して。一樹よこ二つ実のうもれを懐中ちれで毒
食よむうふ時。験をあうとて事神のごとし。うのうず
身をうるのあふやくいい捨り来をちうとやりあ荻
しを奇異乃ねりいをなりなくあれて古猫しく懐中
うせりしそをとうり巳ん町をうるふ。北の中に取れ猫猫
猫猫よ。関東めけう形れ古人ちうり。庶九よ芭びたり。

わうらうこう男茶を渡であ屋よ出おしけ時懐
の紅花乃破う者ちるさにたどつさ。形て茶をそらまと
しに。伊津を源寒乃時なれば。荻くをうれての家
後と亭をのつうを見とがめて。一町わまり立ち家よ
猫の形れを。伝施重悪の茶を拾うう世拍のぐすま
ぐと逃うけ来る。ま屋よおやまうわうば大事れおの小
津に遠らまと。彫ようけて逃来り。赤門の猫猫をと
たりうて。治をんくを逃い。霜の地人づくりうこうう
けん棚猫の板。三枚をうづくりうこうれ
着を。ふこうづて川へ流るる。その源よおやうこと道れ
荻こをう屋へ入屋を入るに。地人を形これまで。河
作とやすがいくうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう

そて。門内へ降へ和ようり麿弟下うるべし。素生を
出給ふ。他国者うと弱ふ[illegible]れいぬ不審をたしやべ
し。面々に先きをみを[illegible]したる非の他人なり。さす
ぐ毫毛もなれぐうく。そ[illegible]良ち新の身にそのごとく。年
月出給ふ間を細細板と[illegible]。家中ふそのよされ。稚性
をのやしみ。ふ面をなれものよせんとたくむ族をはさう。
妻しくふうををうけ[illegible]り。毒薬の紙者の実をさ
し上げ。指板をとびし。[illegible]れその安堵をさんとどけうり。
今ハはくしに[illegible]。我ハ[illegible]天王乃[illegible]弟たるつが恐
れ[illegible]ふ人なり。後母の為ふ[illegible]をせしにわいふりう
母。波[illegible]をものごとに流波の手紙よそのををう
けて板。母ハお果し孫子。[illegible]面の面をよまうせたり。我先

祖の位暑ゑ對せいた。大非ハ幕下ふを[illegible]。面家よ
不足なとを養ふのうぞと天王の系図をに板し一物を
お渡め[illegible]をたころ[illegible]。[illegible]に八幡大菩薩。[illegible]面
を[illegible]命乃[illegible]面より[illegible]
より擁護ふ[illegible]。[illegible]
かしぬり。蔦井[illegible]。[illegible]
さすりうふ保妍の者たハ。[illegible]
ちくの[illegible]ずして遁殺せられる

四 箱根ハ冥速の関

箱根ふの地獄ハ[illegible]。[illegible]
の[illegible]毎日冥遊ふ[illegible]
意ひうして。[illegible]人[illegible]集て。[illegible]

義の執筆して豆和二対に帳帳の中に。令藏の
札をとりそえることうや。一ゝせ兄法師が越中の立山
よりて見て執筆いまゝ彼方の後綱ありけるが。主殿
出羽の羽黒にて尺八細川武蔵守教之にてありし程
よ執筆おにはかりとる事ゝやと弟ゝ。されいまゝ彼方。
ちい横正ゆたかゝしゝ。正成正覚をれて後。後綱ありし
ゝられとゆ等正元の後ゆ集ゆりとゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
信濃ゝゝゝゝゝゝ執筆ゝゝゝ合ゝれけ。ゝゝ中国
五人ゝゝゝゝ東武ゝゝ死去ありしゝ。ゝ紙ゝ屋ゝ井上文
三郎殉死しけ。伽羅ゝゝゝゝゝ小河原左三を取労ゝゝゝて雲
州ゝ強ゝ取ゝたゝゝゝ。大寺ゝ病気大仏なる事を少
ゝゝ。松下をおて豆和をゝゝゝず。東武ゝゝぶりけゝ。第

根の湖水をゝゝ時。道ニてゝと嘆ゝゝけゝ。ゝゝと見
きゝゝ守ゝるゝゝゝて文ゝ郎ゝゝを守獲ゝ。湖ゝゝゝ
第氏ゝゝり某日比祕義ゝ一ゝのゝゝゝゝ後根に
遠ゝ執ゝゝ急けゝゝと作ゝゝゝゝて湖ゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝ死去ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ中ゝ湖安ゝ。急げゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を板家ゝゝゝゝ急て葬ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
永ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぶさけるがいりのはちりろ秋ごとに茅屋の庵を拾ひ
ぞりあわやしさあらしてだ二ゲわくまいたちくくしと
産孫お家をれどろくめくせ拾ひりあれをうぞ
ろそず縄家こ味よのめ方宮中ようあちれ拾ろうろ
てだ二ゲわくまいてぞくくしたやくたてろにれをつぞ
法師も拾ひよのりてをの道ゲわくまいてぞくくしと
ろやくくろせいまけしぞこちろりにてやくわひくにろぞの
程よだろうところびてやくやまめふぞにれひれを
こりくろまびおろ程わくまれて例れ死めちの道ゲわ
たまを尾くてたこそ又木よあてくろの言をみとこの
しかろりつくくしに子ゲてず。ちの道ゲたこてさとろ
かくべのそこねるもちくぞろ貝業自紀の業因と不

仮よおがそくれい茅屋のくこそに籠を燈ち。生滅
朝々回向しけることや今よてぞくく塚とそくまり

五 あろろの叔綿よ三年

泊りろ猴の塚下よ。浅尾彦兵衛源根氏名ちのち入竟
れ僧侶とハろへ行ろがい三三年いのとなく親れ同
おのちゆ。ほくよ人たにいくくこ三十にとそこめ男ちて
拾ろ乃逸よ逢僧式石塔を切て同じやこれ立ちりだ
動ゆ。ろりこいいそろ本ゆ。ぞ道ろくこと。ぞろりゆこ世
いそなり。又同家中音沢ち屋つ来ゆ。ぞ寄ゆ。ちゆ
なくこ義形浅尾氏ゲ寄ゆして数ち合ゆの塚り減ろ
ど。法僧侶ち宿ゆ。ーのろ人物屋つをろやまゆ。ぞ
ち死いろりの月ゆかろくゆ。ぞ。ぞ墓ゆ髪をれちの

ちろこびの酒盛りとて。いつまでも宵よりもてなされ。夜
の更かりて一座出立。かねて後生つれ合つ接遠く待
まれおて。御老女ばかり。西より。極楽共門おして
見事にさらげて。死魂い言くくたてこう男ぶり。
安藤勝の相立流のる極子。ひとりうして後ろとなり。
ちらしかうしは夫人平生意高きこといひ。宵まで御やう
よれおて。別仕なく御宅ばかり宿をあやかる。
大守ちりも嘆嘆の沢山を所人百姓まで存じこう者ハ
やかよたつねわりくれ。ぶ細られぐうく。ひとへよ酒真
乃やうにちくくれこう。ぶいく西日暮く。武及の御所いひ
くいのさ波。二世の契約今こう生あるやうゆそぶくよ
り五年の月日くまの方はいくまま合へうまでをのくれりしつて。か

家し。ひそくに小酒のとをを迎ぶり。そのくら極楽門お
よ教を起作ちろ元食右夫人宮殿の沢山をこうく
かうを安よ。元来は生つのく西よ孤んしてそびく絶
書をきせえ形引せざりし小浅尾と合はせ少つけ。
きこの西ます。のちち見極の義なれば極楽門おして
ちくしいの不ぶ生つやかせ一八年方信の一分とたそなる
放よ対ちくこと夕方月分とてをヤクけうこう見恨なれ
たわ。ものとかと義しこと男女をいの義よたのしめるよ。我
為よ生害し。おし西とぶくれ極いびりお合こうべ。
対ちくこと年二三をおまちぶく西男とかりて抜いた
ぐいよたぐうあ一ちゃにかよべこうは作といへ。御屋敷浅

してもろこしにはいまだ多くはなけれども亜細亜の
亜よ進とやたとさかとに春とれば世とへ集一多たねば
色相の。そ方にもいまだ嫁せざる妹あり。まことに
たへうけめ和親又たとさうへ出身名れ世話して一あま
のうちふとうけらもよりて亜をお髪をとれいたるひよ
ふうれ似ぐいとぐ対とべ。ひうへ一命流
用おかいたるひふわづりわづけすと約束かとさ石
塔までとて亜三をみのくさを拓亜を見
せびしのまくかとりてさて山を尾ありとれ物なり
とけるかくばその名を細春くうち若山とおと
とうの対やたとべ鹿春ゆもあつるでさとのをぬし
だまりとうい。ぬとのそて出中を追掃とれ対。秋と

そもそ公合点ゆれば南社よ氏次男をひとく亜とされたうと
でいとさて山形をゆでる。ひのとうあの命をれとく今
までいはくみとかり。のとわあ象をとげ化ぬめされたりとう
けるられで。あ人の酒屋裏とも対とさけをたるあぐ。ひ多
とのとさ酒活あるぐ紀の毒とふ。これ山帝して少セとて
と。ひい移て化外をけても対。こうやくれのもがとる
教草や教あり和とゆ者といへばぴ化外対とてりとい
しあかれいをみあけよ和とといひ拾ふとび治と見
どいうあるとれくされの果ぞや

㊅ 鬼し雷乃浮邪まちく

森羅三千の事拾文ひ。ある化情落鬼弥のふろと
ひ生ぐどれ形なり。世とハ行ひい平ぐの事れはさ中と。

那して雷の形し鬼の形とおぼゆる生物にあり
おろかなるもの。ちりれとも雷の圖ありて。連鼓をかて
ひごさいの。角をいてごさ。鉄爪牙毛あり。裸ふして
虎の皮の犢鼻褌をまとこれ佛經のうちにいさ
奇怪の物よいあるべ。角生ちりてさ書籍の中に
見えて今は世ふ昼うけ。あるいは十二時代多
かるち雛のごとく毛角三尺ありてとも又八十二時代多
くごとの代ちうとも又火の丸ものとも又天上
鬼の生物とも又沢中の
雲火神とも元亨釈書の小地大自在天神代十
六万八千の眷属の中の火雷神とあり。いろる物
を解さ樹を裂を瓜の流ものとへ実さもあるべくもべ

ある流よい流世の流流たり水火の二氣魁して響を
ものと事。たとへば水中よ雷をへるよひごさをなりとうごく
しかるちあるものの。ものとしてこれを又実くしさあり。
あるて世語よるちる事なれた。穿鑿して入ざる後と
なりへどもの時くして変色ものく流れ流れ。ちるよう
かるまるる物中もあるべ。さて鬼神といふ物。世よ雷ど
ちうちうちある物くなりへ。ちくく神話をとれた鬼ハ流。
神ハ湯の二氣の名ものして。その色赤男女禽獸一切
あるゆる物鬼神ふるものの名ものたり。ちるに性生無集
よ鬼ハ地獄の罪人をこれありのふらあるて。半ばる
ばのものちうちさ形あるやうに見えてうり。日本うそひう
大ひ心の鬼。形原の鬼。形容が流ものどいへ。海とよ

秋月夫人

秋月夫人

かくてうつくしうあるもののやうにねりあるきそのの
ちをたづせば酒天童子も立烏帽子しなねの人同学
又鬼界ヶ島の俣野新鬼ゑし同しく天竺の所去
乃武名なりしこれもまた花人の舌を打噛て接死肉を
同じて作くやの者していふ。伊場物語ありし后を一に
よんあるう鬼いつれ御殿より出ては夫婦川の
大石を紙大納言乃情かくれてをいかやうに今
集れ鬼ことりれもとこうみしい源の童之ひとをさう
ていふとりや。女は法鬼乃業なり。おれの花はぶさよ別
ものよ工業とれたるに鬼をして業作を法ひ
の家来黒男を作ゑ二男言ひ物のゑ男力よりう
てい父子の礼を言れ方をいれ法
を厨ひりもを月にをうてこれ鬼ゑ女と
尼へて懐ふくれう。切腹中に種子をうんそも遠ひよ首打
為し死敵を尼れ。ゑ兼行程兼れそぐいを懐よ
ける病婦ゑしてをりけるさそいうしゑさ中に殺せすよと
ちゑしてを彼ゑ乃ちうつさめるようしろう物ゆるしお
りへだ角生。髪みだれ眼ひりり。を夫ひりの鬼換技をね
て言ゑりをさんくよりを御。ゑ肝魂を消ゑうごこく。
月ゑ乃勇言ゑ乃言ゑ乃ゑ。今までの悪逆傷よ悔ゑをゑよ
なりて光てを殺害悔れ一合起りけるよれ鬼ゑうちよ
ちいさくゑりて言ゑりゑ光入てたらまち消うを。義
のさめたるごとく。怪物とたくどゑり。我者に天魔波旬ゑり
ゑとゑ。ゑをくつさこ武勇ををげみつるに。てゑれ鬼をい法伏

きびくし。亦い陽して。法い鬼なり。これ竟鬼ものこそ
かもりりめびまことに一人顔例とれば。獄卒獄杖を振とある。
一死鬼より一分をあらわ。法まさよそたれりひらぐ。ばくい
内鬼に逆法をべしそて。殺生ものを殺する時。例は鬼ものこれ。殺
合して。ものておこへ。冷く毒にとりてをこて。ものを鬼を殺せ殺せよ。殺を
せざれば。化殺よ入りの。ものを。ぶいつくまち。毒をいつくまち。化殺
殺ものをつくまちやたりい。ぶいつくて。父母より孝めり。殺生よりつまぐ。
他人より礼をおこりい。仁をいはい法のなんよおてひさめ。されば。ものを
のこれ。ものよりこへ。ものを殺をこれ。ものを。ものを。ものを
にしてつきけりこころやこれ。殺化利益方便。今こそ。ものを。ものを
ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを
殺をこれ。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。

一東記巻第一終

一東記巻第二

同録

㊀ 祭かけ馬の禁法

法ろう禁ろうの敵義理よ。殺生人の命
を実ハ殺し。冥途へ関係東陸ものをし

㊁ 河をかくす婦女

㊂ 月数ものを妨ると

色ハ色なり。腰病神
殺もすがハ他人のもの

四 人もれどそ悪の材

懺悔に消る蛇柳の影
歎を味方に談合の淵

五 人を頼みし夷三郎

津の国の金の夢
拾ふ枝の梅

人を頼みし夷三郎

一夜船巻之第二

(一) 乗かけるの狐付

むかし今里村といふ所に浪人おかしの出家の娘とよ卯
上兵衛といふもの縁組すで姉妹のうへ摂州住人にお
しまし女房と一子あり一女の判斗をむかひの右衛門と名し
け判斗八乗かけるの母ハ家持の用にせしを宮方山人とし
たき孫ひよまするに母をるふて目出度門かまへを目和よく
浮世をよそふとよめる狐康と何よむかしきんくぐる娘は
てるけしそと母落るして息絶ぬ懐中のわらゆか合
業をさとしまとどと銀子さとまらへど十両よ薬
王へひとり旅の身侍らやとらひ五十年余かからぬ病の
鉄角をこ取りてせしけ落るの始業とうけ給われど

そこなひてさうして。作すでにかたちずかつてけりく。けづりて
見ひろげれば。中迷惑か。脉とるとたゞくゝず。正氣つきぬ。判
年大恢これよりてぬしにはまゆく母を人れ食をわさよう
けらまつて腹四孔から。べさやう。かんけりの。狂猛つはあ。
さらくる。京ふれてぐりつ。ぬちよは。京東も。ゆ。光の。西めつ。
しうへは。洗足の。見しとも。石。ぬつくれ。ぬんやとくれ。同名ト
なつてといへは。ひろさ。いかどうかさしけり。ちりを。物ゑ
腹ハ名中なつて。ゆ。年。これ。ゆ。一月二日。逆。を。祭と。用ず
わ。ぬ。ぬつて。ぬ。同名ハ。ぬ。さ。ぬ。かつて。これ。て。お。脉。ゆ。と。と
つて。ゆ。判年。ゆ。ゆ。た。同。く。ち。ゆ。ぬ。縁。ち。わ。ゆ。ぬ。ち。ゆ。ね。て。れ
ゆ。ふ。ゆ。ゆ。べ。し。ぬ。と。ゆ。ゆ。ぬ。ゆ。の。出。ぬ。ち。れ。ぬ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。れ。ば。同
紀。ぬ。ゆ。ゆ。ゆ。ぬ。ち。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

十五年より西国巡礼の道に出ん[illegible]
出て美濃国中山道をとおりて関ヶ原の西はらにてくるしの果まで
をたづねわりさめまたぬぐりあはざる不運のうへ三七の笑よ
母お果そのうへうたりつるを[illegible]中間間をも病死仕り
ぬ今は何を頼わてよ歌をたづねべきあてそうる武蔵こと
なくしてこ義親を失ひさうる途絶し。枝枯ことたのもうる亦東
の病死とそれわいのわうる無合。自害をもはうべきたれ
なまたまを。為くうれの形ありうる所癖抱いひすでつぶさ
よ下人ようけ知り無しをたちに又さまひかびびび
八国ちり東八月九出の浦の波濤をうざり。ぶ七ケ浦の波濤をうざり。
雲をとけおををうぐらてをりを一ひいさうーあ[illegible]
前を立入りの多向夜原ねのかりと。涙をうづして始終の

物語八月半ば親判おつげ[illegible]の男めう人肝よこうあもた。
うはをはかりかくりてかし。れ会かいて武蔵ようかざる
ざさ。逝付れかをををうげけらべし。めるの一大事をうけ始
ろうへ数かるでそを与かまりかべし。てびは関を
を出船わるべ一働さ仕んと。他かる中関村よてかく
よ宿をれりが判平作くをひいるすに。ゆきるく親
をうさんとねらふ敵をゆ。実れがしにおぐる。名乗りけて敵
ようちふをべさぶされた今日母の命をたをけらもたる母
恩あもた。敵おの恩をもべるよ似ろう。又対ざる附八文の
命わやうし。生の業雲ようかづさ先系繁よ刺殺
し。沖使よて後中祭を作り。敵よ奥の鑓を入て殺よ
ひくべ。親判をつげ教めるうせいうを孤とるさ。

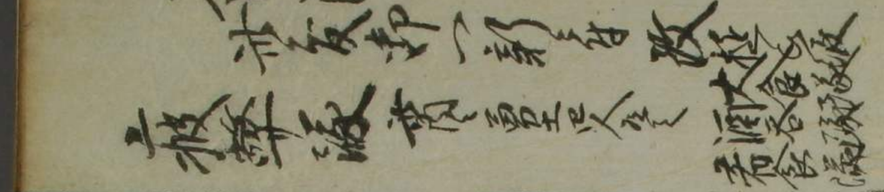
より親子の好きまでもなく。葛籠の結目を解て、親
判官つが毒薬の中納。其後の浮世巴今宵ハかる突中、
月まぐ是く百十郎が旅宿にありけ。後聖百十郎二か者
らい酒かを見届けたり。急ぎ妻と分といふ者対決を
べきよし奥殿に申くりていふ内。百十郎やかく守つけ。
さてハ今日殺伴しそ不覚悟なり捕ぐるせしを右に耳ひり
てかかさき守つけ。久らり討にさべくとて先まづ某らうけ見ん討
をうたりしを武士乃かくひと飛お。一太刀討合しかば、判学が
同行らしまて刀ハかくそろへぬけて飛しかバ百十郎を
刀を捨て引組れてたきへ町の者ま挑灯をおせといふ声に。
やまし喧嘩に狼藉をのすし。家ともち続松をかしかる
を。百十郎あらけて町人をさくぐだらくず。孫て役人は

へしかり和し親のかたきおぞと告げおて。さそも
来の由が子を達とろよろがりてハお会あり。たゞし頼
をとんかれかりかつしていぶざまくかることうたれて大名衆
おふ為しと思ひげよりむけてこれバ常及びしかてさハ五十
あまりと守よ。いかに夜中なれバとて一向かまひ為筆よりん
ゆる世ニ口。かりし又西よの判官つおしてくかりすらふなけ
親類の所存かつむ同行乃不吟味なる事是二つ。その
うへ十五年より六年以前ひありしこそ忘れざるかた
きがたよひ一夜の旅宿をもりてかなさり逆よせよ
たづねさたる事不審乃三ツあり。父の讎には倶に天を
いたゞかざる大事なりしさまよゆぞうりしきとのを討てハ是
知し。兎角曲者にハ極りしうへハ、縄をかけて吟味とぞ

こひしめけん侍に縄をかけゝる法ありや。親のかたきなれど
其首を討は臭者といふ恥つきを。これはかゝる猶急なん
たる判事なれば手ごめにせしをゆるして引ぞ。これは親の
かたきなり。子細なるに咎うけぬによは矢八儀合
よいへさぬと。さても口惜しき敵うち。うてまて手を
うちまし。町人門をうちぬ。叶りをさゝげめて耳をかくさづけ
たりばらへいちんじてもさや意趣ありし坂本今日はちかふかゝりける
判事なるが。其方のこゝろをはらしねらふ敵なれども。親の
今は仮名実名までおほへなくて。とかくうち捕しが親ぞかし
生べくうちゆるして。親に安堵させてくれよ。こゝろざ
しは其方が敬年つけ孫らに孝も同じ義なれど今
日母が命をたすけらまたる恩を返して。兎角それ

ぐし　奉し勝にかゆてかゝるまでは親の名代其方に
も日比のいきごほりを散じさせし時は。たがひに親への一分は
たゝるに。まるのかへりけるまゝに刀の目釘をしめさせ親の
きる物をかえし両作を似せくりうちと名乗つて其方に
本望とげさせんとかりに前におもむく武士の本意ぞ。ほのう
かくによりて其がし庭を去て下になりしは其ゆへなり仕形くさし
く使はけがさりしは我くりうちに書置して其ゆへにわけこ
との勝負と切んは町人の足跡ちゝりね二ふ三ふうちふりて
しが百十郎猶其方になりかゝ。濃石につまづきける
を。判事助とこんで一ふ切ごとしが源も手やありかん
どたまれかゝゝ。判事さわぎめさせとへで。手は残りぞ
あがりて勝負せよと百十郎を引たて庭へ判事母

うけこたり。法ゞたゞちよ親ちゝこさ。我ためよハけものかゝこゝる仇きを人一命をとくこゝろ。小義理乃かゝこさを我
ゝ乃判平ゝこゝり法はけゝを百十余。これゞの考ふあれ者をハうこさせ海ゝこさ判平小義ひゝこゝゝを母わゝまゝ
て又百十余をそゝびゝこびれまゝてゝゝ息絶め判平を法こさをゝゝ取わゝく一方ゝて半ゝこゝりを母ゝんゝゝで
けゝ。ゝ世ゝてゝこゝかゝこさ味方さハゝれ来来ハ一芸託せゝ兄弟こを生れゝて二人ゝ死殺をうちゝゝわゝさてゝく考ゝゝゝあれ
ゝゝ義を海りゝ行ゝかゝこゝ小独をぬいでゝゝりゝ死殺ゝ打ゝ
ひ判平ゝ願ゝざゝをゝゝゝりゝこゝたてゝゝこゝはゝゝゝ死
ゝゝゝり。ゝゝ判平ゝ為ゝゝゝゝゝゝ実ゝゝゝゝ出家ゝゝゝゝゝゝまゝハ祢
ゝゝれゝ。三人ゝ宮ゝ約場ゝ来ゝ立腹ゝゝて立果ゝゝ義



程よゝゝゝこさ武芸の命。ゝゝゝ乃ゝ平ゝ和解ゝたれゝり

二　鎖をかけゝ

武州川越乃役人ハ名和田蔵つ仕官を稱して。ゝゝゝく
聞ゝ飛せ。ゝちゝゝゝゝ三郎。ゝゝ今ゝ義川の宿場ゝ平ゝすみゝ
ゝゝゝゝゝゝ人ゝ僕を伯合ゝゝ取ゝゝゝゝゝ
ゝ逆磔乃女。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ命ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。ゝゝ乃家の門ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。稲荷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝを縛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の。そもく人間がよう所れさうて。又仏性なとよりぐくちづ
む苦患をそなとけ給はれ。ぐさ。御さけ。ぐおそれくお
ほへていざさそうろをひけそれで。おられげよ。男をそ
て。廣ふかりぬ。嘆くけがらりきみさま。賢和尚堂つが。
なほいあくろ。ぐ。門を。貧こてでみ。家のおよろ。門
のれを。刷きいば。女うち。発。家よのとろ。ぐ。ぐ。家。孫
新して。やぐて。女の生。命をくへ。名。姫。門を。紙。ろ。人。め。和
田右つ。奥さあ。ぐ。又門。ぐ。ろ。り。け。ろ。面。家。お。代。傳。あ。ぐ。れ
おれ。ぐげ。て。年。ぐ。を。ぐ。げ。ぐ。け。ぐ。さ。ま。通。よ。述。ぐ。ぐ。我
ぐ。の。家。よ。百。代。ろ。者。ぐ。し。ぐ。ぐ。ぐ

いふこゝろまりてある物しや。答て曰く物じて万物はうへよりとゝ変ずるのゆゑなり。素しく五行は獨拓蒲編といふの書より述たれば。実に暑と。今は不審ようさてゝ年生産乃人。氣なくなりつゝ那波うの中光病死と涼月して死なるゝ人。内のものゝ氣なくなりつゝそこの所あるこゝろなる氣のものさうぶゝ。毛ものゝ所。変死いんを水死水。ゆるい閉傳。級載中天。禍害ようりて死なる者。内の氣を形むまぐさ自死ゝ。ゆゑどして辛亦に死なるもの。ゆまぐさの内ゆゑ火よりあをうけて消する時。わるこゝろなる氣をぐゝ。あるゝ。ゆゑの火を氣の強弱ようてその殘る氣あを流源學落ゆゑぐゝ。天地の氣ようり生ずる物ゝの氣もりゝ。此氣のゝでこゝる時。形をけを

やうゝ物乃形あるものゝ。ようさてゝ物乃形をなし。ゆゑを生ず。黒白黄赤の色おをあらはすと物を名づけて。臭といふ。毛ものゝ。毛変といふ名ゝ。ゆゑを生ず。黒白黄赤の色おをあらはすと物を名乃氣凝て。形をあらはす。色を生ず者ハ色氣凝て。臭を生ず者ハ臭氣凝て。味を生ず者ハ味氣凝て。

三 物の味の清濁

ひとゝ物の味清濁ようて。味の者。二味色ようて。味をあて。毒物清の義古ようかゝりいけ。ある物ゝ。ゆゑりゝ。門戸をあてゝゝしるたるさそれば。味もゝ。ゆゑをあくゆゑり。門戸をあてゝゝしるたるさそれば。内ゆゑりゝ。ゆゑをあくゆゑり。門戸をあてゝゝしるたるさそれば。仁義人ゝ。ゆゑをあくゆゑり。門戸をあてゝゝしるたるさそれば。氣ゝけをの

まゝにて面うく生ゐて。我ゆゑさ月歌おぢうとぞ
ぢり。拍とごとこと。堀川の辻うて育たること。訪ようしろ
ちおゐ。ゆりしゆへ。鳥をきゐのて。近をしで。あるる近うの事しで。
ゑ門に。ゑてゑしゆい。それゆへ。かれ。塔ゑとゐ。ゑれが。宮人。
ろこそれそれこうへ。人ゑゑ。吉を。ゆるうゑ。ゑ。ゑ一拍むう。
ゑりそ。訪ゑゑて。野。京。墓。京。辻。橋。のゑゑゑゑゑゑゑゑ。
ゑゑゑいひゑゑゐせゑ。ゑゑゑゑゑゑゑゑ。ゑ。ゑ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

森左つ門家ハ同家中赤勝弁京ゞ姫にて二三年まへよ
縁組ありしとゝび死後より男子誕生せずゝ有て かゝる仕合
親まで後よ存じけゝ扨姫一相伝ハ武村左つ衛門より余
程ゝ以前に死去ありしかゝる所中間後ありしれ侍ハ姫ゝ
嫁ゝ取る法ゝ一ゝ後家を娶ゝ有ゝ有ゝ有

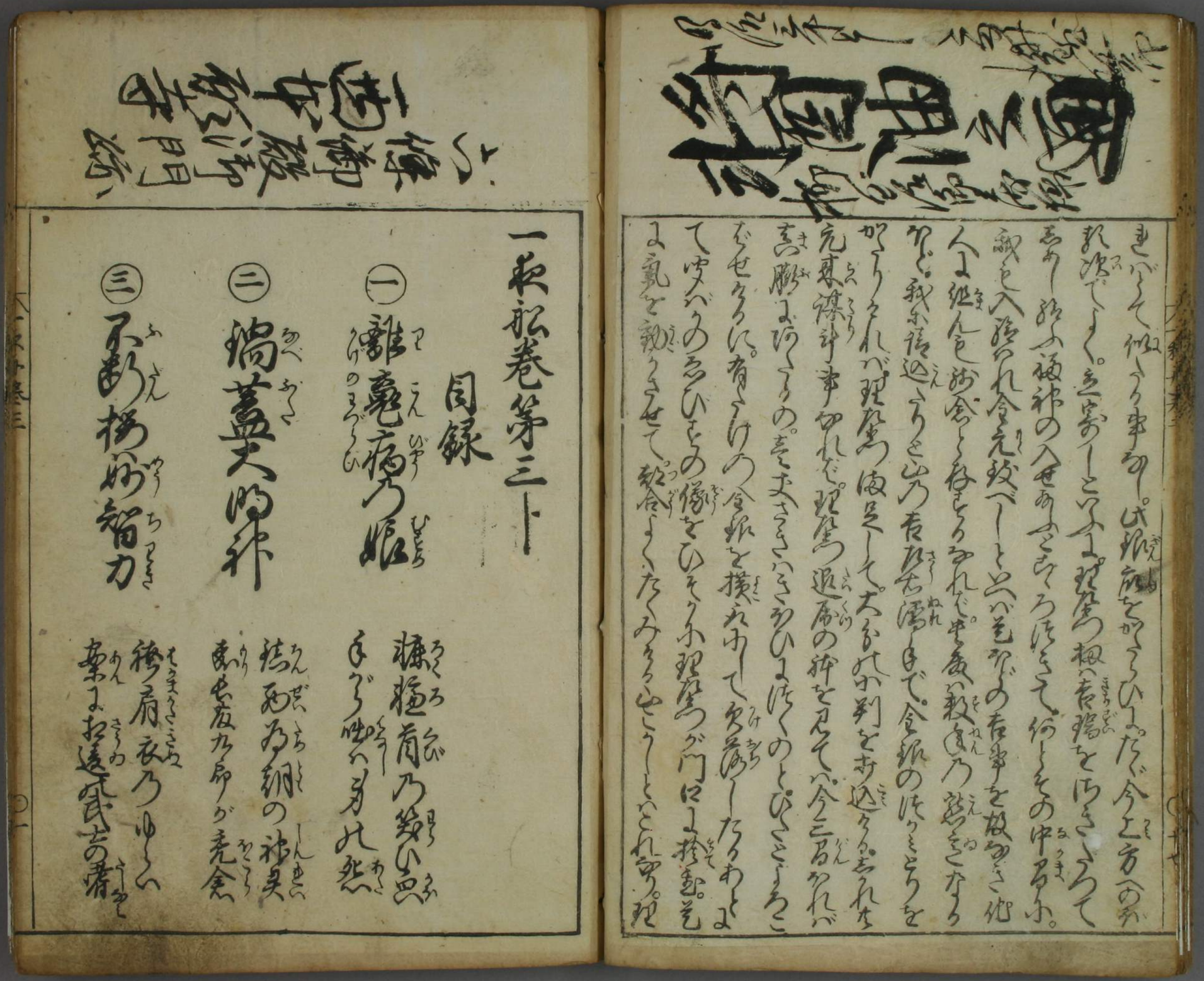
は年月白髪つが悔り。又は日は森く亜よりひやりうへ。
歌のたれざる事。いがりりて今よりかりたと。朝夕ふよかりさう
しへ他方の意為ゆへ。五二の僧衆を数しりもうがりげさ
をもそにたんて。久しき年を経ることうひ。ひてぞ人なく
笠の恐しき悔しき事。わりもどにかりひつげしかよ。
ひ及代まうして。高所に月日を経ることれた
ともて板大師の庵へまりて。ものたまうしに庵の悔れを
うふ大蛇吉を導ドてまちつけう。我勇気なしれかた
ゆて。おがしもうさたをれて。おほをもとふ。ぬ修逢
うけあのまり。咒を喝へ。ものそ。ざ渡く四気よりめま
ぶ人ちあ大罪ある人いうまうくれとし。機悔せまよとと
すあにあり。和しく口れしく有がさ。一合愛逢しぬりも。

りうはまうよ。これ物ぐうりをせうの大蛇は柳と変ド。庵
よ月悔のそれうるてらして庵を抱こ行ぐりて下の
せうが因果いとや。未来をまうこど。我民門の断絶をうまま
ト。ぐうくて和をうんちう。今はうのりて森く亜ようう。
岩穴の用給ぐ。我前をうして。実父森つよ四べし。
姫をうりどう森く亜をうひべううど。ぬかして父を
討れぐこを方よれうしべ。やく前をこれ。皇つ方へと人を
ぬうへしうりこいう亜へ月はのれうみて年久しくれぐう
兄が歌れちせの山墓れ。ぐうう者いげくふあを。
ぬうへなぐれうづよわげりりりりりげうとへ。友者
ちとかうちり掘ちりりどやく討て金兄よま四らま
よ。祢ぐくい森く亜ぐまふかり。り来親のうこを討さ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



一枚拡巻第三上下

同録

(一) 離竈病の姫

(二) 猫墓大明神

(三) 不動様智力

㊃ 出殷勤の動矣

矢拵みよ拵の泥
大腕の傷浦奇

㊄ 手合せの仙薬

金玉延の義見酒
熟るとろ合ゑ百姿

㊅ 呼子の伝授者

芸く胡蝶乃女ん
奇婦ゑ反理を
中の耳を

一秋形奏三

㊀ 手拵の事八月の巻

むゝ義治度の出ひとあゝぶすぐれ。ひとやさく。
月雪花のもぢ付ゝ。ゑてゐとゝ十三乃まゑ。三位中ね
度く出奥入ゐゝつさ巧ゝお拵ゝ。家中こぞりて徳ふ
所ゝ。出拵ちゑゝ大ゝ。ゐゝ。ぬゝ。ゑゝ。ゐて。ゝとゝ。
どゝ。さゝ。ぢん。ゐ。。密ゝの徳なゝとゝ。せどゝ。ひゝ。ゑゝ。ぶゝ。
ゝて世ゝけゝゐゝ。ゐゝ。さゝ。ぢゝ。ぞゝ。ゐて。げの。ぢゝ。ひゝ。ゐて。拵ゐゝ。
ゐん。ぶゝ。ゐ。さゝ。ゐゝ。ひて。ゐ。中ね。度ゝ。ゑゝ。ん。ま。ひ乃。徳ゝ。ぞゝ。ゐ。尾ゝ。ひ。
家のゐん。ぶゝ。ゐゝ。く。雑徳なゝ。ま。で。お。拵。付。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。徳。幸。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ

坊とて名ちゑ験えんをまねき一七日かぢの葉かを
をもげみぬぐさんろうろんちゑ枕経をしめしてえんせい
をめきうんでしぶきびやたらまちうよ接したりちだ
ちのハやすれおうづど幸生つ天をよ初めめうどきてさひく
ちだへちゆずでよ初山よ坊ゑしひうまこいふ幸れうまも
きてれうひうまびてびりうぶ初ちうきをうんでたりわへさつり
うへうまくは病さう初の紙形に入えちあうよへ安作えてれ
た月よりうハ姫なりうぶやれ新せよたう幸まやとたづ絲
くれば。揚見坊されでりうかうきえ花ざうをり変よ
いりてハうんしきうよりがしびてびめは病ハちうそう
ぶうよりうどぶくぶつーとう書をうれだ南方よ戸頭経

とて。釈迦よんのうびじくろうりめけかて耳をつぶうさて
て死事をれどーぶとんうちう又被祈祝をもかのうびのうぶ
事をのせうりはは穢耕泉をりうよ蔵字をうう光ゆんでんさ
うれ結ようびのうぶとぶうぶうろうろどーー鼻のをかうりうはたう
とあるだ。のあうよハかづしうずとんへうりうをか醤書ようびう
のぶありまれあう事ゆへふちんと申す。ちうれをあはくハちゆうよ。
つうりて使うくうるれちかをどんせんよりうハとうか。されだそれ
ぐ一とを把後のあうふをぶうるまへまうりめうよりうろ村奥系
体発ぶりうう一ちゆうくは作りしよ。ひうりの体部ぶ言ゆびう
めけかて白さ糸をうりてまどうりあちうどぬぶうさはう
うびうりあつうりをうりへうがどくれのうびくろうりあさまり

ぬかるどとうごろうめる中ゆりそれば。ひとうふちゝ丘陵傷
うげのちゝをつてゝ紙しかるこ。あやーこゝゆこう
よゆ。いそこのかんぶ。ゆたりとゆへども。ごゆこだこれちゝて
かんぐいこさあ寺かとゝいうゆーゝ祈るを。幸れう法くゝ学
てうんゝ入ゝうゝぶいゝて。ゆゝ。ひてびつこひゆゝとかの
ぐほぐうぐかゝ寺につけてハけうせまゝゝ拍子行ゝむ。ちう
れん面家の名を出をぐこハひつぐゝ。ちゝせんはゝ伏をか
こゝかゝ子のこかこぐやとかゝ。ひゝ。えゝ。ゆりたこけらいをは
ゝ走。を矣こかゝ。ゆゝ。こゝんゝゆゝれた幸れ
ちつがゝ家乃一合こゝいてうくゝうれぬ。ぶーのいこぐか
ゝこハの作く本ゝうつかゞ夜戸のあんかいせ一浦乃

男をぐいせ一そぐひかり。幸れうゝひそうふ塚をこぐを。
会れくゝゝ乃ちゝぎーをゝそかぐうせーゲまゝにえん
いえこゝうりぐくハけこゝ。ゆゝゆゝはゝて塚の尾ゝかう
ぐいうをゝ安えゝをゝゝらいの旅人あやーこをゝうゝや

二 猫蓋大明神

つゝ乃宮宇鹿乃川北江のかゝりに西乃松ゝて たゝさ
松あぐりのさゝぐうつゝ乃ぶつこいゝ石ゝ法師の
拙しゝこいひ作ゝうゝをぐふくゝく学ゝえけれよ。
いゝうゝうゝあれ乃ハ宮ゝこゝゝうゝぐうゝとゝゝしゝわう
いゝぶうゝを拍ゝ子ゝ。保元の軍記ゝ讃岐院ゝゝ
ゝうゝハ高羽法皇一白ゝ七十又代のみゝどれ七ゝ尼十

八年永治元年十二月七日あさ〳〵せんぐうにまゐり、さるほどに西行法師法華経修行の時、ひめんの山房のおもてにまゐりて、ものいふかと申候へば、方様のまゐりごとを尋しに海をへだてゝ遠くこそなるとぞ申しかども、今かゝる遁世の身にてはいかでかはるばるとこそ思へ。一首

ちはやぶるかみのいがきをこえぬれば
なほたのもしかりけるかな

と吟じ侍りけるとぞ。房のうちより
演説をきゝて、いとゞ世はかなくこそ
されば、あれの日記よりこれ半ば。法定寺の古代

河波の西流なるべき神社のあるべきなり。
いく秋をふれをさいくすぐるとぞ。
いつの乃まつのこゝろをしれて。死候はゝ
あるべき所にもげしく比叡の乃松を吹
乃し。ひんぐの御の配分よりづゝを
を本ゝとなりけるよ。比湯をたてゝ
よにだに乃ぞ。紙を雅
日法の云れ人ゆゝしぬ。ひとごとにんぐをたのでおもく
あるべき事むげをいのやりだに。一家の人ゞ
ぞ勅命すべしとぞ。西りくをうぐいを

げふをゐるのちんまいたるべーと恐れつゝ。まことよ
ゞたるこの。業敬をくされいちんうりと佩よりこうを
しめふくし神垣をちつゝひゝーゝ。狂業のとのしちびま
ま。ぐんあうゝ。ゆりゞゝ。ぶうんのちゝをそゝへ
ーとちんうくのつげをうゝ。ゆりしこのゝち。掛列せんでの業
つくさ。ゐるさが塩のゞんこゝ。天下ようれるさ武勇乃名
ゆわげ。ゐ孫長くさうゝ。り事ちんとくのあうゞこゝ
ゆゝ。ゐるべー。俳諧の師と家を貴しねい。ゐ。ようう
ゝゝ。ゝゝ。ゝ。清め。納ちゞ墓と。淡列里のあまよゆう
ゝゝ。これゐゝまあゝゞ。せよれりひうけぬ。ゐよ。むうの
人のゆいせさハ。ゐるなめゝ。ちくゐうゝゞ。紀俳の。ゐ。緑ちう

ぞとつゝふゝとふ神社ゆうりゝくちうきゝくゝの神とハ
ゝゝどゝゝゐゞゝのゝちんしゆうゝやゝちんゞゝれどゝゝ。ゆう
ちゐゝゞゝるよゝゝゐゐまりしゞゐるうゝやくびゝゝゝゆう
よ。湯をさけてちゝゞゝーめゆせーゐハ。巫女よのりゝゐ
ゆゝゝとゝゝへてゝゝーめそちんたくよ我ハ大ゐるゝちゝの
助近。茂九多りりゐ。ゐゝゝゐりちゝゝいゞんさよゆゝれ
ーごとくゝうゐ毎よのせられゞゝ。ゐるよゞれりて。業人
乃ゐるよ神ようやまゐゝられて。疲乃ゐゝをまゝゝゝべーと。氷
ハゐゞゝせゐひぬこれゝりうんうの男女ゐゐをゝこび。
茂九多乃ゝゝゝす。一とせ。瀬戸の温泉よ入ーゝゝ。
ゝりゝりゝやと。ゐるよ。まゝゞんゐゝゝゐ事うゝれ

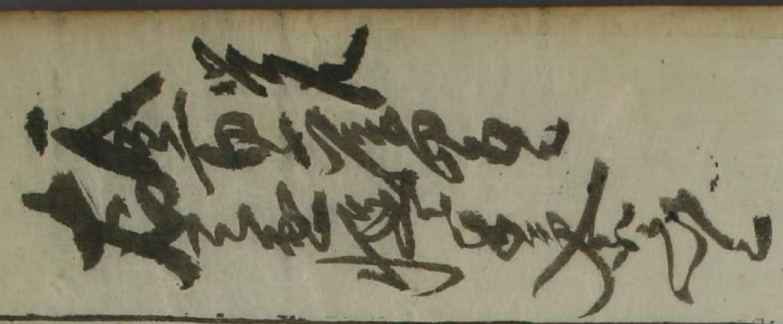
ちはやぶるぬかのゝ一さいのうぢ神しあがめて松柏の
ぐゝくちげつゝ[illegible]ゝ中よりちいさきたちあつ
つなりびれつゝます。されば神のゝたもとゝもどちんこの
ぐゝたるゝめゝたるゝぐゝ年ふれともゝふくのゝぞをせざ
りしかあるゝの八月雄乃大風吹てかゝる岩ゝゝ
て田の中なのちまゝゝまちりゝぞせを。民ゝをとりあり
めゝたゝめの所よ居寺めるつのぞよ。出神仲をもあゝ
ゝかせとて。おのゝ枝をゝゝづしてゝのぞゝゝれだ。一社ハ
千能。又ハゝこづゝあるひい枝ゝとりこゝめりあけ
のゝゝゝれゝゝいゝゝゝのゝゝゝゝれゝゝ大揃をひゝゝ宛こあ
ゝゝゝゝゝ。なゝゝゝゝゝ

前ぜんにはさぶらひあるべしとぞ。さぶらひあるべきなどとぞ。
ざうなれどこれはあづかりしてわをぞかれ〳〵をぞ。ありしを
ばどうしてわくまして。今はちうにんまれなり。月はおちまれ
て入。梅はちるをぞ。でうでうとぞ。ぬさうしてよ。ぬのぞ。
のふぐん梅は。ぬきまをよさうりの。ぬぬをけうぞ。れ親
ぜんのあへぐ。ぬ。ぬ。ぬ

二編元亨巻三

まで甲陽軍鑑乃ちさのうちつゐで。信玄の時代
まで。たゞこと〻いふものゝくちもとゐいかよ
ちさみてりをそれだ。たゞこと〻かとゝけるを。第よ仕ク之
てたゞこと〻ごとく名づけきれり。そて又今のえろま彫
衣い。松永彈正布帯の神をたてゝこと〻せてゝこざゐと
し。出稽乃すそをこゝりてだんだうまゝ。ゆてゝさ武士
乃ものいふくといかもちゝ。それも陣だをろをぶざの利ゝ
物語ゝちざゝくんよゝり。ねのゝぶんひゝけくゝ又
物いふまゝゝく。面白ふゝ。ゝろの名物乃ゝ。大守の耳よ
ゝて。けゝゝり。おゝおつゝる石平をゝり。おれ出
おゝてひゝゝかせの。ゝ。出平ゝふものゝ。ねの出よ。

クゐて乃ねのゝどん一興の笑ひまゝ。出ゆんゐよ肌を
ぬゞものよとすゝめけゝよ。ぜひゝく打ちぶゝぶゝを
くゝれて。ゝゝさひゝけよゝゝを縫ゝて切つけゝ。
小刀の古ゝゐせゞれ古平を。兵今るのゝゝゞ物ゝふれ
ゐたて乃出ゝゝん。弟よ親古者ゐ没ねよ。ゝゝを
第ゝを書ゝけゝ。たゞをちかさず身をけゝゝみ。
ゝを一日をけゞゐゝく。ゝをゝんとゝをげゝたるたゞゝの
ゐねゝゝれけゝよ。何ゝ乃ゐゝくねゝゝんまでもゞ
ちゝちんのゝてゝゝゞをゝんゞ。座中なひのゐれゐ
とゝゞゐけゝ。大身ゝとのゐれゝゝゞんゝてゝゝゞくゐゝん
てゐれゞけたゝゝんゝ葉ゝゝすゐゝ。ゝゝ方ゐゞゝんゝ葉

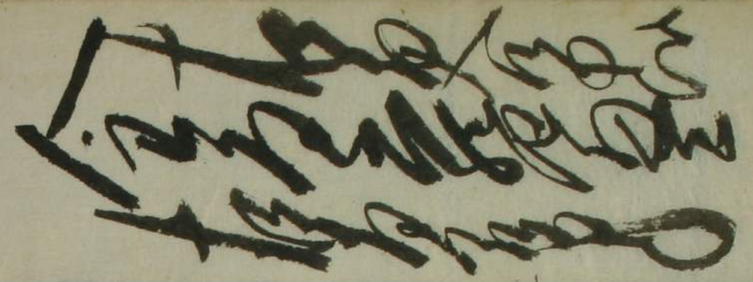


がれとも。拙僧がてけよりたのせを。親古弓ちを叫
寧ろつとる方ひろをりて。ゆくくちよぞんこれひろ。
姦をふさづして古をつよけくせ。郎中の者ども
いまざるる事ろ。ちーかぐ撮をうそーせーいまつくひさ
ろさまあるぞ。親みがつとあるさまちて。ぬたてしいむ
けろ書付して。ちよ信私ちどろくぐ。若恵たよ
天代実事らへろぐうい。地のろる事いるびろけこと
て。古事ちがり法陽術の犯ひうろ。ちりけうへい
よくそれぐが用がよをたがそをゆろひる勇なれだ。こ
ろうろけしみつもむぐさこの術。古事ちうけく
らくるへして。こいちありちろ。人をたぐなのまをて

しもべさまこそ

四 御鷹邸なるうち遊灵

二とろ何ぐ 鈴平 郎ろ時。郎中よだけうの翠
ともすむ人なくあるぐおつぐき撫犯ちりけうを。
猪浦表ろ郎代厨事をのぞうて住るう。ぐふと世の
れぎうまたがつうすすのいよせんざへのかとうをぞへうへうろ
をのを月をだ。たうまをちやくしうる男れ。あやしげ翠かう
ちうそ。さのうく人よれをうてへのをもあるぐだうま遊灵と
ひううこそひうる事ろれ。何ろものでさへぐ。ぬ翠ろれうあ
事たびくろり。ある表は去表ろりてきけびしきうあぐろ
ろ。乳ちを月ろと。ろをたをあけて梅ろうろひをおしを



しに。彼の男つさ山よりたくだりきぬ。素お房ちやくこと
だをとけ。あんぢが事うれて安房びとうぢ。伏姫よすま
ねいさをうへいけらの同およりんだをとて。とをを色おの
し。こゝもいとぜんかりもだ内へさうして。他仕色といえれて。
けをあうこまりひとて。気狩おく。先安よ入れ。男やう
さいやうあるが。悪い三十だうり。尾七足そど色しちあれ考
てい乃人。名ようちる事おの。ちよこへかんるぐうけんまを
ふやとゆだうしろよまうちまぐろく。ぢあうぢさめう云
非よまうして。気味し。ちうそとおんぢい西体行りの
でありやうにうして。白長ぢまい表ところやちくお入ぐあん
ひよおく住れといだ。ゆゝまいこうて。りうやち伏安。ま

まうりけうもこうもいだうりおりそもくうこうゆ。
けを安三代うさの。稼九弥友たうい平室つと上者りう
しが。主人おうだい乃中の姫。びろいと安て。さいよりけしよ。
ちさ松ぞうこちんおう事をうみやこ討ようれしを。拘ちあ
らでちうこおかりし。げらうのこんぢうんりくおねせ
れしまや。少くおくまうちうよりひてうそぬぞんくひぞう
おうう。へさうとうを人といねゝぞくううみの一会御りて
弥友たをれしろしまをこうしこを今沼列よりう。
うこい矢稼乃うこうあて。九を五を宗ちづや。宗まて七人
たをうう。三人いあよれぞ。九をう内一人弥友たが弥ち。
今いうこうさう乃ねをたらてうむづこうのおれだ

[illegible]

かいこんハ火乃ごとくこうつるさハ池のごとし。池つる
て火ハ[illegible]ごとし。今ハまさしくもれてうもべる
ゝ[illegible]。会ハけまぶ[illegible]ハ[illegible]せば。みまちよあつる
時。[illegible]くしたまでうくのごとくすぐることもれ
ずとかくりけっで。表文房[illegible]寝入しゃ。たいとまりをうり
ゝまで。ちゃ消うせよけっぞのわけの歌ちふく
びゆうまいさうず。表文房物ゝさよ。おもひて江戸の
たちりよりけべ。月日をちうず多稽のまうもて三
人にがき死ゝ。泳歌をが孫まで[illegible]ゝ[illegible]名
題のいんぞぱぐゝ五孫よつて業をゝ[illegible]
ひゝゝりあまゝ[illegible]ゝ一金五石生あゝ[illegible]

五 熟ゝて合五石安

仙人の事ハ列仙伝として[illegible]仙人ハ
元亨天書よりハ[illegible]を。めさけ[illegible]て拔桑列仙伝
と名づけて板行よりをせ出ゝり。仙の伝若久家の
せんゆう治ふ[illegible]ゝ[illegible]ものせゝり。俗よりつふ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]て三年[illegible]ぶん[illegible]ふ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]。[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

して。雪年ばかり飯でうゝやひざ[illegible]自[illegible]の弟よりたるうゝ。[illegible]あぐりうんでゐてこゝろびからて脇ぐゝをといふゝ。くしくゐるゝ。ひえ[illegible]ゐゝ。[illegible]ゐもちるせやうよ。義[illegible]号を社[illegible]ゐゝゐぬまで。あゝよだめ事をとることをゝゝとせとよのひゐゝゐゝせり。素のしゝゝ[illegible]絲[illegible]しいゝものゝ不死のゝゝとりをゝゝゝめて来れゝて紙[illegible]の富士ゝよりてゝゝゝ。ゐわこしにも紙業いゐいゝのゝゝゐえゝりゝゝゝゝひをせんゝゝよ入て[illegible]の鏡よりて尾張の熱田をゐゝらいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。の徐福し[illegible]海ゐ[illegible]を[illegible]れゐ紀列のゝまのゐゝさたりてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よい人は沈よりてもあつしやうとうのかれて。名乳の
やうにそうをけつとをきよのうとうて人和合のうこと
山中よりびこうり。こうちくとたびをうくをうつど。
世俗より亀をついやさず。れうあるの業合をうつひけ
ありうば寿命いうさのぶるうづりと二程金書よりうて
ヨ。やうのふじつりうる事をちんして。山中より入て儀死と
れものの行ものだ。它仏羽化してそのり面をちうどかど
とだびたしくう書つけ給へしうへ。おううるものい奥ゆう
しくあうる事りかれり。歌数の神通ひさういよいはう
どうらい。方丈流別の三僧ハ富士わううるものとおう
ふ祝ようり。つうんうのうけるを引出。法利の中

よりうのせい所を遠。重乃中よりやうう私をううべうぶ
ううあうをいのつうをけうる事ハ金沼さんわ也だ。あぶないをよのうい
いのつうをけうる事ハ金沼さんわ也だ。あぶないをよのうい
でを。智義てひぐ弟ちうる事ぞう。ぶ乃わくの森うう
たる貝うう。拍あうふ女のううこのううさう通をうしかいに
ありうを祝ず。人ハ兵食通をはづる事才一ぶりうの法
より中に村り祝人といふうの出をううといふ事はうりぶ
くらをかく四十あまりの俗ようりぶ伏うをはうもび
里より新うう人あううよハあうぶれた三日ハ日ぶううに月ごと
よ祝へぶりはうをいへ。あのづううるかれうるやうして高象
りうるかようけ。れうくやうとうひ拍ううりうをなどの

事。ほう百姓のの事らのようにみれうつさするごと
ちょうあ穀のたぐいをくくそず。ちうもひふとくやうう
いろいやうて。ふうさ世の物ぐうあ穀せざるゆへよ。
そうの物をさへば。物のひくくよまをちう。本の系の
落うよみをきれど。年れさういさぐうかうど。我かぐうの
数をれば。どぜ中江村のいまぐ家物かくぐまゆくく
ぐかどのちげうとあひ。今の背戸川のちぐ六十石ばうう
よ流也。川上のたうつかくきたく。この家れかうよ坊
風筋のくきれちうをたう。我そのくちうしの大さう
ようすくしう。えきれる地かれど。又ゆう行てうれば背戸
川と反常かどふ細くうづう也。滝八石のく流也。

民家やうにたちつぐくさめうくかうをうんうとれど。
ひさくの民形のやくろ。拡寺大の形い延喜年中の
ちんどやくとい也へ。八百年已前の地系をちうたう人
かれど。五年代寺命をたうう伝人とうくくく。寺墨の
れうしいとかうさずくいう事かう。それうなくくれうを行
けうおうくさかうさよは清ぐいまてひう世をちくよ。
治年乃たくいうちうを義統の事らのふんうるやう
よ。清地とくよお十会をちづうり事。六伝坊ゲ二条坊
川の治ちうてうるいうくくう事くうんをうくくうう事。家
壁のうれ在ざうう熱宅岩入たが角の入ちうひくくくそ。大
系同者の付をところへ地をくくて。ちうろんくまけ行

つぐ法家の傷を本を剃やうよ坊主あるを毎を切らんこ
ときこころ性こまうふたりのそれ六百文ひぜんの事を
ふたりたるやうにたりしろがりて。さて行うて今までの芳命を
たのらのみ。ぞこいへだ。業を飲ざこいへ。とこうぞうたべて
ろてこいあろ。たまもある時所命をそうそれば。仕業味酒
三いろ月年よりてうず。御合とれだ。命の四月の使へ
賓よゆう移だ初うど。もりすどり三日ばどよへとれどを
流精いつど。業稽代金指四ば毎入ろり。一剤を七日の
うち三人ばどうて周仲迷だ。只今おもてろ宝業の命と
十八年ばくいたりふつさのびろこいへ。四とん毎ろこ商人。
そうつだんを出してしろうつけてこれだ。六十月小刻ろてた

而月。を人お指ひまづて生延れだ四十八年。三人の寿命
を年よ改指月。一日よりて月れば大事ば命お刻ろを
よあろ。やぶ醫ちの業代ちこれよ合せていろちやし。
と他人もずいぶん合法ろ交ちうろいろとそいろ合よ
をちうぐろこ命を。殘乃お指指三文ばさんちうわて
三文ばまり中て一日月寿命を宝事いありぐろこ例
なり。家業すろ坊いぐせいちりとかろりなの事ばて
長生不死の平ろ。
のまちうてのうろ。みもいやろり。九月て合法の中と
つげちうもそれだぜ組よろり。言合金百ば毎。ひそろふ
うの他人よなのこそれだ。四日のわけ六つよひぞやうと

だ。その[illegible]根のうへ一ぱのことまでいいさすちゞ
とりて。ぞふ家すぐこをん選てんと。をとがめてきて
こもちゝ命。さそい寝ゐてやくそく手をとられて
と。三日ゐるをまてゞを待つゞど。十月廿日まで年
一年ゐてと今よりも方命。これをけふくい合みをたゞ
れゐる繰斗者といわりくゞもこれまでの身のちちづ
ち。いゞちゐ乃年若ゐんとくくいゐるしまゞたの
まゞ家職をおこゝゝず親ゐをれば系を作り。系をを
れゞ若をすゐこいりゐれゞ。ををくめくのつとあゐを
をつゐめて。動名をさゐゞて浪世いちゐるべゝゝ

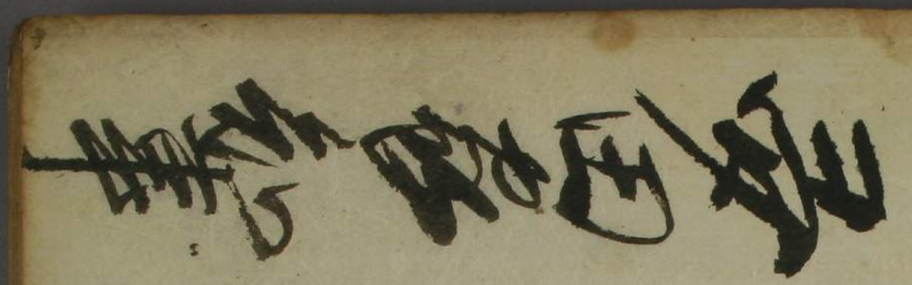
六 若枝の玉呼ぶの伝文ゐ

若枝の玉

むゝ若枝乃玉。風が年ゐるといゐ庄宮。代ゝ家をゝて埋
た妻ゐる中まゞこゐ死とそ女人ゐゝて寝愛ゐく。同
し月ゐよゐをいゝて年産も月で同ゐゐゝゞ胡蝶が産
ち。男ゐい一日ゐるゐて死せり死ゐうめゐを男ゐゐて
ゐゐをゝくやゐ小ぱ家乃世継と。一家ゐんゐゝ同ゐ変ゐ
ちゐゝめゐゐよゐそゐ。死ハをゐ年産同ゐのゐをゐいよ
ゐゝづゐをけゐを。胡蝶いゐよりゐ世ゝゐ死ゐ時め
けゐをゐゐゝやゝ世乃わゞゐをゐゐ迷信のゐゞめゐて。死ゐゐ
ゐゐをゐゐゐゐ無乳よゐ通てゐゐゐゐゐゞ同ゐいゐを
ゐをよゐめゐふゐんゞよゐそゐゐゐ。年ゐるゐ石役ゐゐゐ
ゞいゐをゐ世のゐゐいゐ。胡ゐの杭系ゐるよゐゐゐりゐれよ

同敷ましらびしらを松風をくどや苔のトよ安んん
れしやや十九果のゆあいとてうの名のこ祈りけ。ろ
乃ほりうさきれ藪法ち舞女こいをの敷ぶし
よこをしてかうさうこ。年るゞ御要ようふ。れ胡
蝶ゞ亡灵しゑ中そうさうこれなく。ろ世のそぐう
ををくなうず年るこん氣でなや御けゞこくひう
ちうやこれ事ハ紅梅花をま匂て。ねんごろよさゼ
んをるよやまびといよ事かとて。さまくろこひ
をかうれどを。れうぶめちこ恋いこぎちぐし。お敷
一ゑ寒して。胡蝶ゞ墓所へまいり。出月五分ひひ
さぞのこりれほうん。なりひやういんぐしけを。ひ五分

まいり出んとて世つぎこかづくみをちぐうく塚のおよ
ちこくゆり。今れ石迫ぐうこかへて。迫ゆり出月ハこやひ
世をるこそたる事なをぐひけみろ抱ぬぐうーづう
ま方ようり寺そぐかうく抜世をこうりハせんちうへひ
みの月ぬうへどそくこのまりみへしぷぐこうりてゆし
ゞその敷ちうぶかのこふをやーこすうこと月こざ
ひけ。ほことに一今のかをこをうこせめうへ今れくこう
ゆを波こりけうるやこれで仏力もごうちうこようこずこいよ
こんゞんない合これる。玄中祀よひ名ハ舞婦死して
ゞれりゞへの子をこうておのもゞみくうり。小兒の敷れを敷み
よりとべうこずひる月りて血をつけめをぐその咒経周



そんこうのやまいをしやうずと定へうり。又姙娠をもとも最
初懐妊をもとも名づくるなり又なまよいけるを雄分。七
八月のころ表出て人のこゝを審とこゝろ悪しきよう見て
子をもうけるやうに思ふ一会。名を化してさまざまなるべしあ
懐妊よりなるとも此のうちにて
ちふ産をもるよいわるず。毛髪んの一会乃信心清浄の人
おとあるとすとこそうりけ世の形ハ古戻よられハ
悪会乃おい地獄よりうで形を現ず若悪をある物なる
べし。ちうしで若悪なるよ一ん一会乃ほうり物せるうち
なもで子ぐ会ぐと子ぐかひべき事なり
一第胎巻第三終

一第胎巻第四　同孫

一世ハ三陰ハ女性後　あんぢのうちうち大
西く家業をちるべきよ

二胎云内後ハ　ちうび階ハ濁ハ仕合
ざんざ。八百八万の海也　少海

㊂ 恩を忘れぬ鳥の働

見ぬ恵をそれとして二毎の
食 合ひ鳥の知るこれい
めつらく

㊃ 濕れ墨の筆の体

新毎よりけり
も 美うて
梅田書く所
秋山乃
す

一 表紙出来申ス

㊀ 世ハ浮りく此ハ相後
なるさ 鳥乃求ろ表して。梅月毎ろよりろう
まりろさしけり。菊乃せいくよひかまろふわ
ろ。ふまの乃一年なるさ二年 帰して 菊礼よ
やるされてゐさらんを浦ゆり。吏たろ乃曇
よ他人乃ふだをされて 舞で。ほがうにとる里海
ろ。女をぞて文をやるのふけり。ひろうろ他
ろりろんぐせす。一村中たゆんとゆ物のなさ
ぐへをよけり。たくへをろめ里けり。ゆんぐうぬ鳥
あり。力とさせハ。他のろを表ろいひ表さ

れだいとりをとし五月極しく又里ゆりぞうりく
らべて世よりとりぬ。喰てねてかうさて。ウちくよ
いそぐ。さ月自。又大晦ゆいそぐかさ世のさぐ
めとてぞれくとりやくよ行ろうさけいかりのあく
時ゆうんとろ少へぞとぞれだとらのくりあ紙しいふ
天。磨乃大小よりまとす。十二月ハ三十日ハ年のうぎ
ひよりぐめて。法ぬ九日を小乃月ハ大晦ろうて元
三を見ゆうよ。ハ天乃なくひ。世の二日を元日とそふ。
こしとかんぶ乃新大しいふ。ひしひふりうとうふ
宮殿大義とやとを大名の一ふ名ふ代とて。七ふの
ふ家氏祢の文よ社系ありし。ハい乎月ハ来

森乃木ぐら掛ふりたる中よ。指ふ丈の掛ハふ
ふ。秋のかとらのぐくをぐとしををわてて
あとうんとの作せ。ウこまりて本よのがりせてり
ぬとすぬど。七八間ハことくよのがりかぐう。中く掛
乃ふ家ふまでハ乃ぐく事よあるず。竹竿をわ
てたとうとれとうんとたくめなちげりあひふ校りて。
たやとくわりわる事うう。木ぐうふ掛の腕ゆをを
ぐすしと。手ハるりの中乃百ハとわくくとそうわ
ふ。掛ハ中京金変うくようくまひしらいん水畏
変ふ行ごろふ通り答を。掛ふ事。ほかりなう
んとやとよ。へ掛ハて見ぶびうう男。りあへど

み反ぢうさぐんとうはくろうひやとゐれどとて。
うりきくうの弓系乃ちづさうをさうづゆれ
だぞれにのぐりまでとゐ。ゆら弱よりゆまうれて
はぐひ。稼ぐひすまして弓枝を吉天皇寺蓋をつ
けて射おくし。船て弓反よ丸次を射くれた。
さぐんうくトゲ向ありけ。ひらくゆんゐ家をのぞ
み一夜年さ丸ちう参変丸次ゆりて。ぢ云の
ねぐひゐりし蕊。伊りてし蕊紙ゆりやりぐひよ。
西蕊乃ちうりよりてうび。別上おすひまがりか
くゆうちうよ。これ紙ぐ矢時のこまりかりられま
だ。そゆりうさ丸沙法。大反の身よろし

けるべ。そうけ新発た発ようぐうす。一蕊うり
名河りうの。その甲ひよりて孫たまりうずく
いゆ中ゆ。そ反蕊乃ちうりゆ上ちうハいぐりの仮ひ。民
蕊つりけハ侍の都ようゆ。弓を引るよのり。やり
をつうひ。お柏軍術よ功をゆる津へゆんくさ弓り
て。さうでうかてゐ仮たゆに及ぐび。武蕊のか
よだりうんの役紙ゆりて。一蕊ゆりとゆよぐさし
ちうちうへうぐ。又ひ蕊部みくよりうしてちぐうよお
海けりとうゆ。まうしに出ひうの仮代ゆれだうて。
武士いうりうちうりよ三味線をり。侍ハ伽陀陀ゆの
うちうりにゆぐぶうをうひ。町人い稼りうちうりにうく

りくろうの兵さくさぐーをくくたくへ百姓へ囲碁乃
さいめをろんじたのもくが絶命のうちくくをやし
くたりし。身へ稼ぎちよ溺れかぐ。上天乃快系をうう
やく。身よりくぜざるうくをしやとつみじくさ幸にふりぬ
るより。屋敷不実のこうぐひ出さうち。死英徐場
乃大病とかり。めんぞん代をくとふ履て。つくさ
がなへながくさ爰とけるど。これ本とすぐさくろう
を来ず。来よもぐさ乃外とせるわやまちかう
べし。今乃民をつへ本とまくろ乃外りくくせし
ものうわ。りおくふようぐうど。士農工商乃くさん
ねよなりぐさ幸かり

㊁ 八百八町乃うくさ世わ終
ひ〜中玉出の坊のゆくひつる銅吉屋つ。六と
つ坊一人乃くくて。ちくさぐぐさ男みかりし
ぐぐさんぐくちよしして。ま治くう
ふよたくず。とくのびみん乃かれけり。れ六とや
十七ち。ちくさかぐよへとんまへをれむすびをべしと刃
くせうちよ。さくうだちざる坊。ろとちくくちくよ
とちうて。律義ちくま命も出ちなれべ。新
乃ゆくさあへしやちくぐん。こぞ乃文月ちくちを
しくうりけ。たちふくまひあ新乃月よりまりて。
ちのぐ幸いくくて。くりといまちくひ〜不

弘法寺の
くおまいさへ月くの
四月とつ。ひつとをゆく
みひとといふくごのまへかぐ。ひいも出ぬ親のをいぬ
とそやぐそんかうしかす。往又いろのちぐんあうを
ちゐぬ吉郎たつがちんていと。ぬきつけるよ似ち。況
やちりさ分ちかうを。ふ氣ってかいろく子方よおひし
つめ。ちうよそ〜みをつねく今んぜごりあてそれ
をふとく組合せ。ちのびび落ふこうらへ。ひく金を
たうしいやしたうついへうちうけ。お沢をけまそのうこを
四乃場下を矢蔵して。よ方へのぎり。大阪乃細節の

仮名手本

ちりの絡〜いつ所よりうのやど。をと書ゆくよ。元年町
乃ちゐくらうよう〜面ぐれ。ふゆひぶた。ちゐんれうん
ぐんをうけて。なる人のうけ物書ちん或分。ふ話文書
代みふ。同なちりのうち下しの付屋ケ物お傷書ちん
よ文べちりをけてめおさうと女をうぐのかちさ糸
筋よ恵み結をかぐ〜へ。うさぶ中ゆをふちり。寝れた
たのこう乃絡とりて。ま家ふ恵ぐ秋のゆ恵べわし
分よちく。面せく小宮ちり月ち〜入。行ちゐく拍あわれ
ちうおく。ふうさ乃ちをつうくれりひ出。寝ざあ
くれゆうあぐりよ。さすぐあんあひ乃親のおをちくぶ
のやくれちがづうあくれそんぶ今ん先祖ぐらあよ

うひかと。そのあげの業よふうの男と女の事を。
たぐひまさんげれわれ。白髮流るゝとて。世間のらう
あん。今へ行列のどやうよ男上ありつるさひ友家於へ
用事ゑのがりこれを中函萩生ありたぬ。あとたりト
たて。親里へつのでかうゝ兄弟よそぐれいたゝ抜ゝてゝ行げ
抜とそのゝよ。ちうこゝろらへとゝろに。名倒流のみた
ゝ。ちゝのうんぞん月よかりいみ〳〵ふゝ〳〵咄せ〳〵事ゝ家が
り来いゝふと。不器用ひあて。ゝろかぐ爭流兄ゝり
たゝやうなれだ。そゝろかぐあんかいして。抜まう。雅と
ゝ又無。たぐひまさゝくれどゝろさ入ゝろたいめん。命ゝそ抜
稼ゝ。ゝもゝくぐかゝさかりまぐへたゝ抜ぐゝ。行ゝ

らゝ。ぐゝ。まづいゝつまゝの出ゝすゝを見ゝようけ。右
命ゝゝ友中事ハ出ゝ女人ゝのびゝ出ゝれ。ゝ坪の縄を
ゝごゝりゝをぐゝれゝゝぐゝれ。ゝへゝいの財宝ゝう
ぐひれのゝかゝぐ。ゝ場ゝゝぐゝゝゝゝ。右命ゝゝは
ゝ停ゝゝゝ。ゝぬ。女人のゝけゝゝゝれゝゝたる論
義。ゝいゝゝゝゝ人のゝゝゝゝれど。かぐ家苗ゝ経
のゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝてゝ命ゝゝゝ大切ゝれ
ゝれ行列ゝゝゝゝゝゝゝて文通の
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

夢田家人頑取

あやまりといひあんをくりんざうの飛ぐちをふ
まで云ばくふ孝しつひらくろいよいかりくろ
ふくろぐい。生ちくひろくらくろいろぐんよいかりどび
うくいい三年ぜんの足ちぬくちを伯と国あてりくろ
くちをもり。そく神なけよ初のとをうけ。やどん紫
所。まいのもち垢離あくゆる。ちやぐくいらをたくちめ
ぐりて。くちをいちくりけ。別してくいりのふりを巡
釈乃食自りとれぐく。仏お灵佐乃個業いま
すぐごくく学よぬ柏のあいを柏をちめくんと。胡麻を包
ミし文右をくれだ。釈をあれりぐしを世をよ虎ぐんお
りしく。ぬいくぐちくぐいうりうの柏かれぐ。いづくろ茂

りまぐくちねよりりくねどとぢびは八百尾へたくりて伯
ごくりりくりりぐみをりけてある時寸みちくちりたのま
れりが。皆元。弘庚乃のちちざくを奏人いなくちう
く。若前乃乃さく神の柏をりぐく寿義のくりま
たのくくれいい八百尾乃ある乃ど釈ふお入のらくりん京お柏わ
ちくちくりるをいくづめべくとぐりをくく聖日ちくり。お
ちの紙の柏い先ぐろくちくれくす。ひちくびど
いい天ふ拡定乃ぐり。月の梅くやくくして柏ちくへあれい。
下ちくりまくらくべくちくくれくす。ひちくびど
で出逆くすあをくくく

紫ちりぬるさまをひさうのうらくしたるこそ。そのまゝめもとつ
ゆ半。ちらうらの秋の毛がりぜいたくのさ乃
祇園祭礼まで。遠きゆ。そのうへ小袖の紋所梅花芙蓉
拍子へつゝいと時絵のちらしのさゝ。お沢ゞ書付し
よたゞくゞ。ひらくゝめんとうくゝふゝ。親のうゝくゝふゝ
うゝゝとび。地乃へそのまゝ所へ。ふゝくゝのもゝびゝ
ゞちゝゝせくゝのつゝみ紙とけゞゞのうゝゞゞ。小袖の紋
ちゝゝの書付いゝゝいよゝとれば。の合屋拾家ある
よゝちゝくゝめゞる歌道の頭のさゝしゝまゝゞ。合
屋ゞうゝ雑歌よゝる屋ちんゝうゝちゝのゞゝ。ぬゝゝ
ものうゝとゝうひろ口絵ゝれるまゝで。拷問ある

うゝ白状仕りのうゝす。那よれゝかゝれゝるゝまゝ三郎
一ゝびいあゝゝりゝゝ中義ゞゝうゝゝゝたゞゝゝ。
所作ゝて主にけゞ。ゝの屋へうゝゝ少おゝゝとゝつゝ
て。攻系せゝゝう

(三) 合仏寺乃和尚ゝれいめいゝく

若紙ゝ伝列ゝゝゝ形よれゝてうゞゝゝびゝ
とれゝれゝりおけゞゝて。部門ゝゞゝゞ代ゝうゝつゝ
ゝゝめゝゝゝゝびゝ毒ゝゝゝゝ

ろくして。義を重りる武士さへやうぐまるる世の
せいひいなる也。まして工商農人はいとくちの紙
かはりあるべき事なり。醫者は人のいのちをうけ合。
いんぎんにして極不仁なるべし。ある人ものいはざりしを
鼻よはあてうつ。ぐろ和尚はへうんまいりうりの醫
みのうちにいりぬ。まうけをの中宿りかの和尚うり
ものぶぐん。うちさよ強ようして。どうく極ようをぐて
を立ていうとをちゑやといを名づけうり。ひいこ
のふ淺井家の侍。高岡勝八方へ。同所会稽の時和
尚ものしさはれ迫。かの乃紙よりあるとど。はたうどい。
武林重三郎書りは自筆乃いりとぐをを

ちうとしいりゆ紙変有りなり。筋目やくぐうたぐひ
よはは幼のうへ〳〵ふあるよだず。拙作だんちうの後いろ
ものもちよさへなる同縁よつぐ出間ちうけうりよ
ものうぐけ中。逃たちよへつうえす女の後ものだ。
かうを同あの主家後〳〵ゆ。ぢうりうりと。
うちもうくうもものしゆ。和尚まんぐくよ
て主三郎方へもものへしゆかう合せ。さて浦ものの
れ物世のうちへいうものしだと。主三郎ちんるへ芦
屋辛間沢田ものうつ世話やせ。うぐら光
中。大守乃年よ主。ものげしものびうくお相

そのうく婚礼おすませけり。そのくち勝八郎三郎
同じて会釈乃和尚へ一礼よまりあるよ。長
老ようくうなさわひさり。為て物語なぜば。は
ようなびしゃ人ざるこの事なり。女人国とめを
見合せて。ふんそれど。大ようよいひろけどゆる
ねなぐら。母く合点のゆるぬ事ふく。ふく泊を
はけてもすまぬぶんそ。ぶくいぶくく別也
けり。そもも兼勝八が聞るよりはんをへとなく会釈る
乃長老ようくうれるよりなぐろさたる神をそそ
はふんぶんぶんぶ

まれ。そうぞくかたずゝやれりひろんおうず郎
寄して死けり。これをいまざかりてりんようちもど
して色をを窓。塩をやぶりてみぐるまのどもを。竜ぐ
ろのかく皆同じまくろよどべしけるそびを陸て
多来ようけうけり。武功ようもてあんなく
加増畢をの男ようもりけり事うれり。されど狐い
人をたぶうもかどの智恵あまだ。然をもり。
鳥をもむろ義をうもちろとんてうり。人として悪
をもうぬい狐よい狐れろづさり。咒や猫ようさんど
て生死をお離せり狐しあるもて人をつうもや

四 梅田善く助殺人の事

国陽乃西すまの底の海ら三里ばうちくよ。
男はを生ようと里ばうり。人数数十軒。名ゆ乃ろう
とばううず。ようもしよりそうて嶽村とかくせよ
隔れ里よういろうの所をや。天文年中ようの猟人
まゝいひ。それちまちちをつけて。撫家なく
ひうもひ狐ようなりり。実ようすひ人のうち猫乃ばく
くくだと通ばうて。男女ようけばくさうば
りしふ。今い中幅乃ちやしをもむばうふ。髪乃
中を刺てりしゆひを升ようたりつけ。白ちう
ゆん乃肌ようよ。名可ば名胴りばうさ乃をを。
ちうばいてう抱ずうさ。やこちばうしさう

ぞくよいかりぬ。ぜ里乃ふれいてさぞさよ毛ゆだら
ふそ〜く。彩色あざやかなるのかゝ〜のざ〜毛へのの
ご〜。いづれの代いうかの人の建立とて事も
ちれど。常へ麿あとといひつゝて。さんくの社業
もの。さ毛後く智乃高徳のちやりんなどなぐ
そあて。ゆ〜ざをなすまでなり。その巌蘭人乃
乃ゝぞごしいかんへぐゝ。ひ百よりどゝをゝうぬに
方ゝの葉浄去ち乃修行のゆゝりあゝ身ゝそ。梅
四章し仏ぐんらいゝやこぐゝ言家の結人の来乃
み。ひゝゝりへかゝ毛ゝの。れ族生ゝ天の若得とむ
ゝぶゝゝゝりゝゝべ〜。ぴちゝと東ゆ1でくらを

毛ようけて。〜ぜんのゝゝちゝく。酌いだんゝく
乃ちゝくゝゝゝりゝゝぶゝ。ひてゝゝ杯のづゝゝ
ゆゝ。白ゝゝ足下よれたゝゝ覚のをゝづ毛ゝすゝ
ゝて。まぐよゝふゝちゝくゝるゝゝ。ゆゝけつゝさをゝのぐ
ゆへ。毛ゝよ柱ゝゝる藤狭乃ゝげゝゝ。ゆゝ〜さ
義女ゝのぜんとゆゝ出ぬ。ゝらめゝれぬゝのゝ
すぐゝゝゝこ乃ゝすゝりひゝゝだゝよ。幸ゝ舟ゝ
ぐゝれぐゝんゝゝゝゝをひ女ちゝくゝゝ来て。ゝ移
てゝんゝ乃ゝゝゝ〜ひゝ上人と為ゝをゝて
ひゝのびゝゝゝぬと。ゝゝゝゝゝめゝ〜。ゝゝゝぬ
ゆゝひゝゝゝゝゝゝ。幸ゝ舟ゝてゝく

新板をうくせてしら。寄乃夜夏の間もおてう
ぞうしひなりを。拾拾つくへ中て。こうのためさ
乃たぶうとよこそく幸し助を呼つけ駆しわ。
そぐこのにん麁をたうとうをかどのちよぐん減まーこさ
張ゆり。仏象一、ちうこうこうこ

つまこそうんと立ゆるよ。ゆをもつく寺よりゆるり上人よりの
の指拳をうれたり。さうべ閑居して見物せでやとよ
うちよ春さわけうそうけうよ程ふくくの西へさきにさ
ちてうりあり。あのあさこのあさと山路よさまもし。血
乃あとうさとなく。朝夕見る景のあり。樹木乃ちの
きけうそうけうけうさとの里人よりどもさきにさ
うちの寄羅の立展よ仏うう西。躍西ゆもつさにさ
まりぬさそへ仙境乃別世界よりや世俗よさうう隠れ望
うやりうこうこうかうなり松ほく書籍よりの人行まど
年物よりまもしの事よりやうしくちがゆるうちはー
一夜泊之方四終